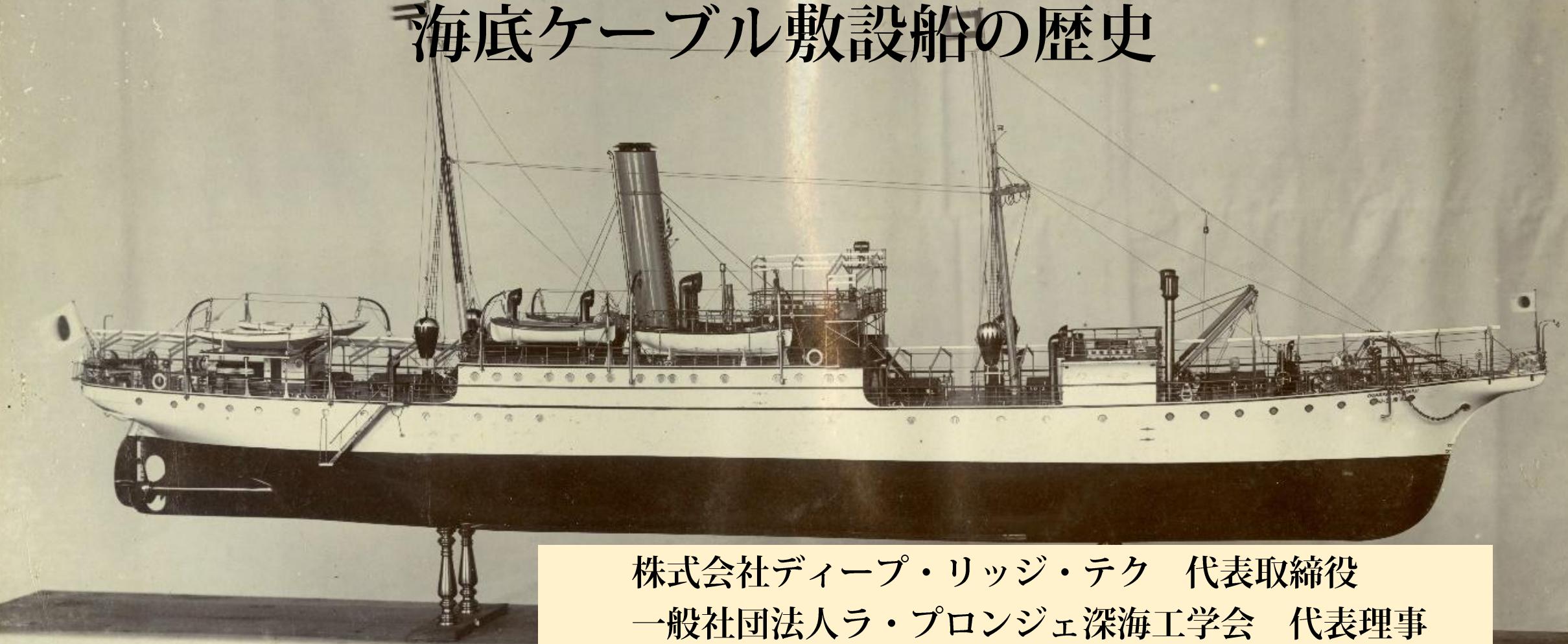


沖縄丸・小笠原丸から始まる 海底ケーブル敷設船の歴史



株式会社ディープ・リッジ・テク 代表取締役
一般社団法人ラ・プロンジェ深海工学会 代表理事
東京大学 名誉教授 浦 環

写真提供 (株) 三菱重工業

小笠原丸と日本のケーブル敷設の歴史

NTT WE MARINE ホームページ

https://www.nttwem.co.jp/special/cable_history/chronological_table/ より抜粋

- ・明治5年（1872）8月 関門海峡・前田～雨ヶ窪間（1.1km）に本邦最初の1心GP海底電信ケーブル布設（担当、独人シェーファおよびジョンス）
- ・明治7年（1874）10月 津軽海峡、福島～今別間（40.2km）にストアノルデスケ号により海底電信ケーブル2条布設
- ・明治8年（1875）2月 明治丸、英國グラスゴーより横浜へ回航
- ・明治10年（1877）7月 津軽海峡海底ケーブル修理、（大北電信会社へ委託）完了（本邦初の修理工事）
- ・明治26年（1893）7月 長崎平畠～五島田部手間（96.7km）に1心GP海底電信ケーブル布設
- ・明治29年（1896）4月 布設船沖縄丸竣工（英國グラスゴー・ロブニッツ会社）
- ・明治29年（1896）6月 沖縄丸英國より長崎へ到着
- ・明治37年（1904）2月 卒土浜（対馬）～巨濟島～漆原半島間（147.4km）に1心GP電信海底ケーブル布設
- ・明治39年（1906）8月 布設船小笠原丸竣工
- ・明治42年（1909）6月 大連～芝素間（166.1km）に1心GP電信海底ケーブル布設（8.16一般公衆通信取扱い開始）
- ・昭和20年（1945）2月 小笠原丸、静岡県下田港にて空襲を受ける
- ・昭和20年（1945）8月 小笠原丸、北海道増毛沖約4海里で魚雷攻撃を受け沈没

遞信大臣 伯爵黒田清隆

明治二十六年九月二十六日

ト定ム

遞信省告示第二百二十一號

長崎縣下肥前國西彼杵郡福田村字白濱ト同縣下
南松浦郡福江村字戸樂トノ間ニ海底電線一條ヲ
沈布ス

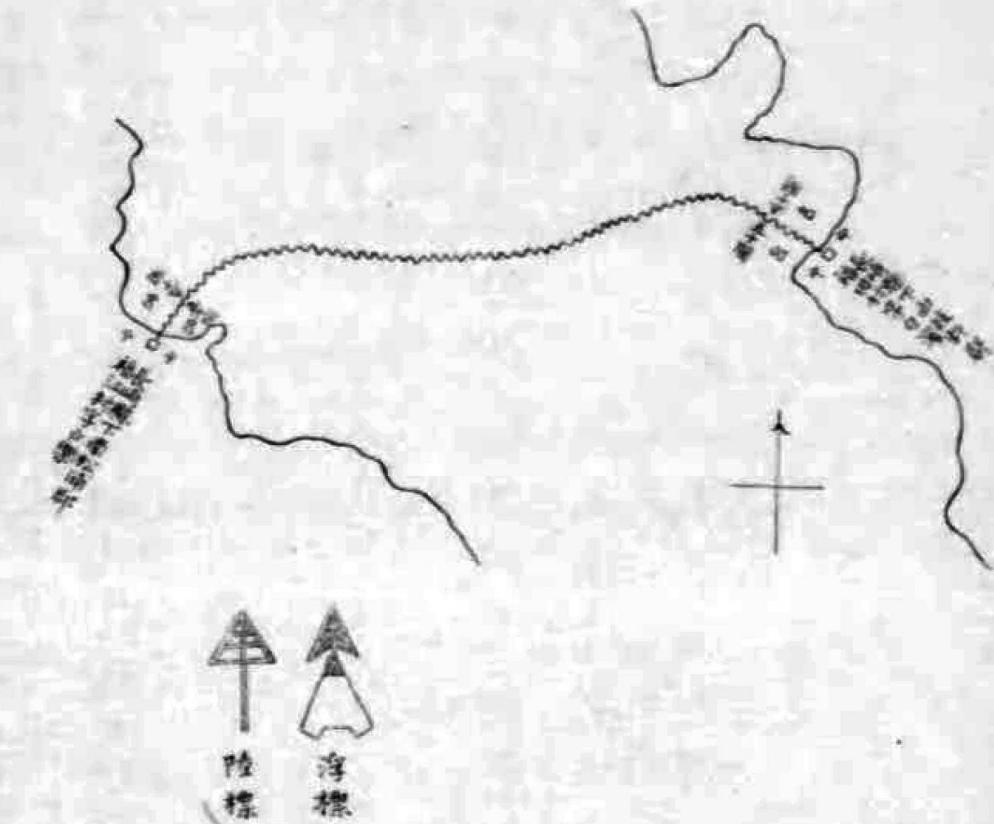
遞信省告示

校正

印

監寫

底



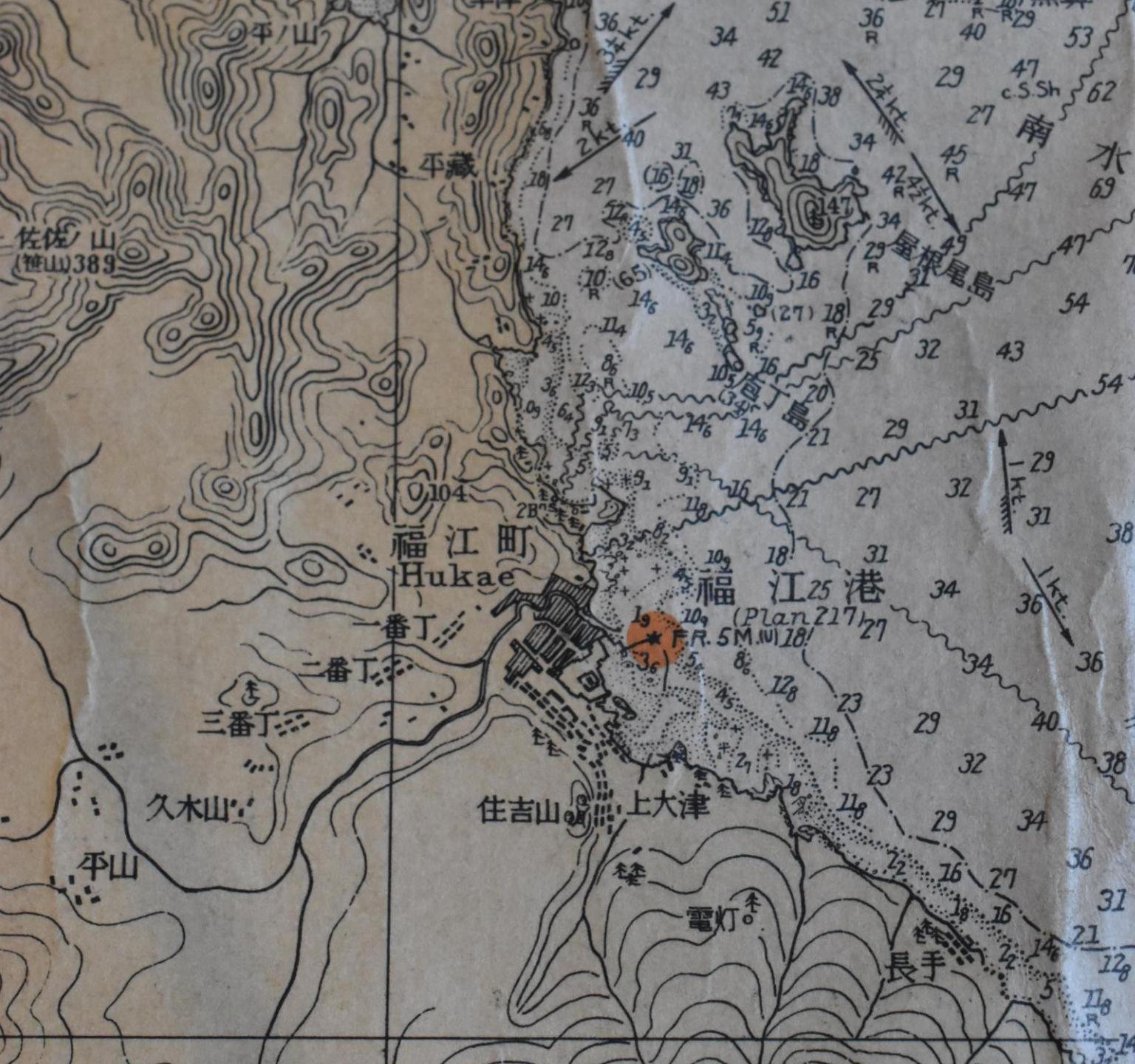
明治26年9月26日
官報

遞信省告示第一百二十一號

長崎縣下肥前國西彼杵郡福田村字白濱ト同縣下南松浦郡福江村字戸樂トノ間ニ海底電信線一條ヲ沈布シ左圖線條ノ左右各五十間以内ヲ以テ該線路内ト定ム

明治二十六年九月二十六日

遞信大臣 伯爵黒田清隆



本土への海底ケーブル

戸楽一白浜

（長崎市柿泊町白浜海岸）

田部手一小浦

(長崎市柿泊町小江小浦)

昭和8年に作られた 海図

昭和28年改訂



長崎県五島市福江島



遞信省告示第二百三十五號
本月十三日ヨリ左記郵便局ニ電信事務ヲ開始セリ

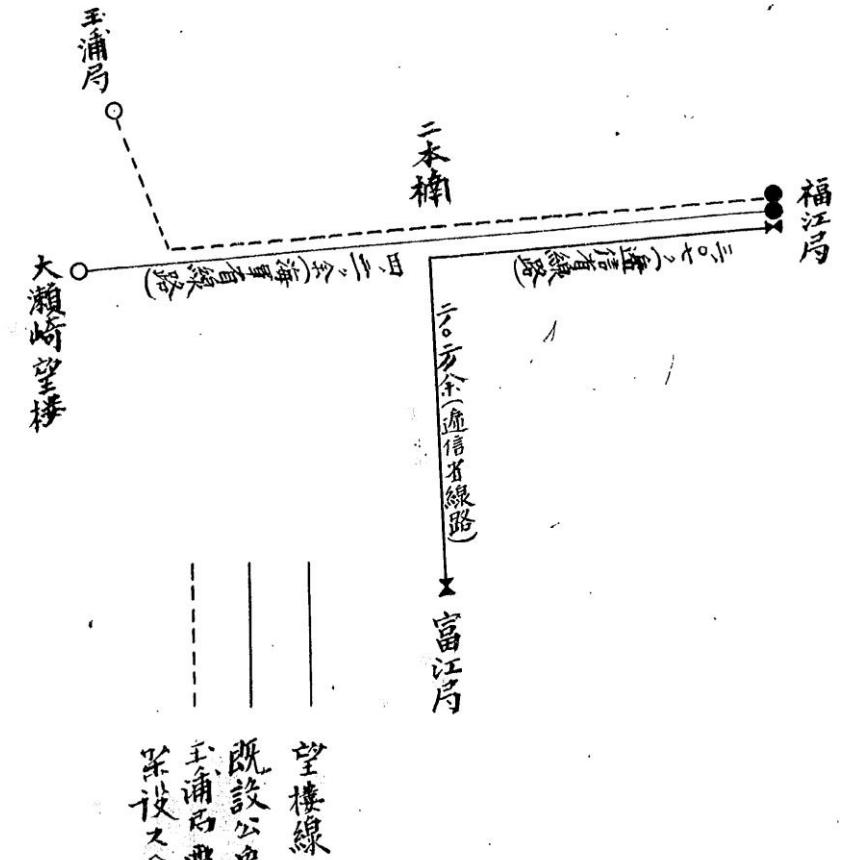
明治三十八年五月十五日

遞信大臣

大浦兼武

位置

長崎縣南松浦郡玉ノ浦村



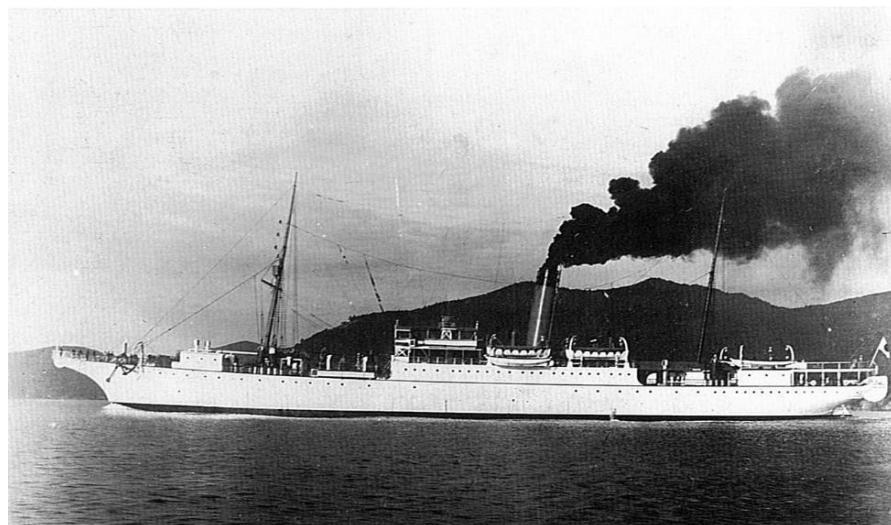
明治から昭和初期に建造され、
利用されてきたケーブル敷設船
(通信事業史第三巻より転載)

三 菱 長崎 造船所	神戸川崎造船所
明治二九年六月二日	昭和一二年一二月三日
一、四〇三	三、七〇〇
一、八〇〇	三、〇〇〇
三聯成往復動汽機	減速ダービン
一一、七節	一五、節
七四、一三米	一〇七米
一〇、三六米	一四、七米
四、四七米	六、三米
三三二立方米	一、三四四立方米
直 徑	直 徑
直 徑	直 徑
〇、九米一箇	三米
直 徑	一米
直 徑	二箇
直 徑	一箇

明治から昭和初期に建造され、
利用されてきたケーブル敷設船
(通信事業史第三巻より転載)

南洋丸

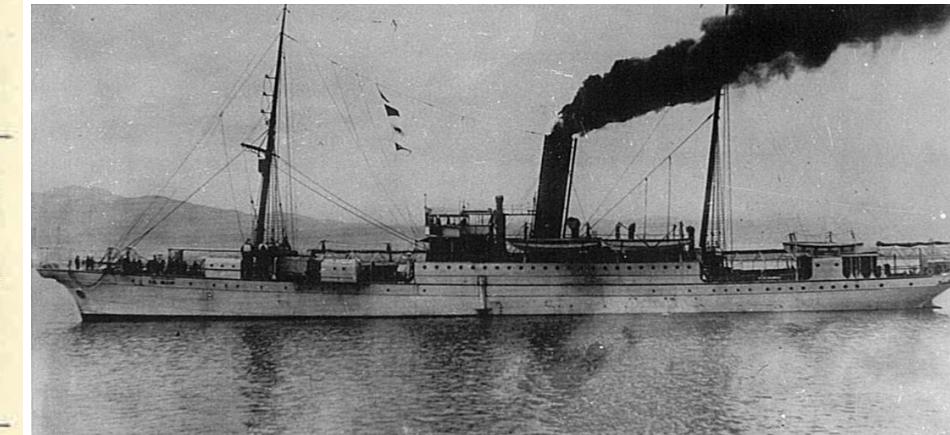
1944年2月20日西表島西方海上戦没



https://www.nttwem.co.jp/special/cable_history/cable_lay/pdf/nanyoumaru.pdf

沖繩丸

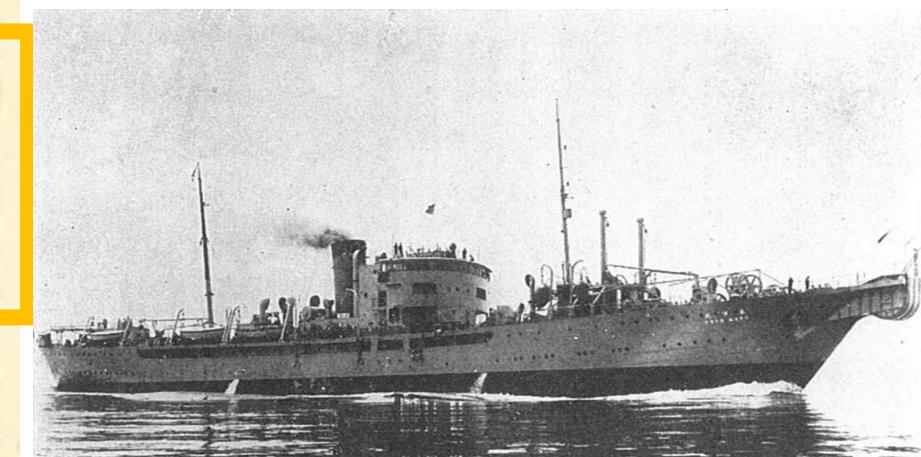
1938年7月引退



https://www.nttwem.co.jp/special/cable_history/cable_lay/pdf/okinawamaru.pdf

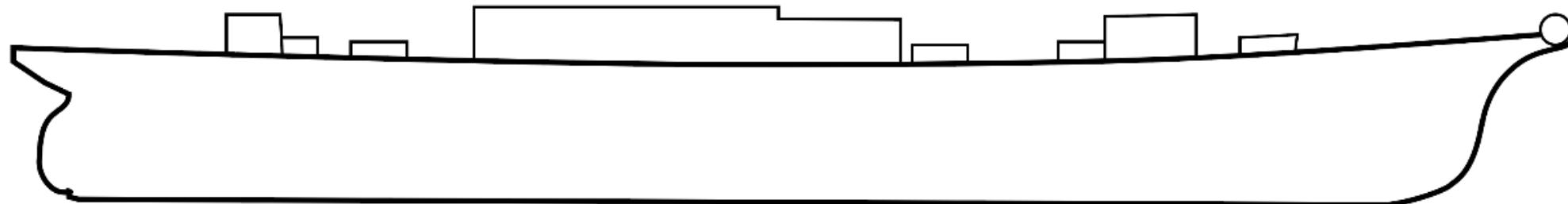
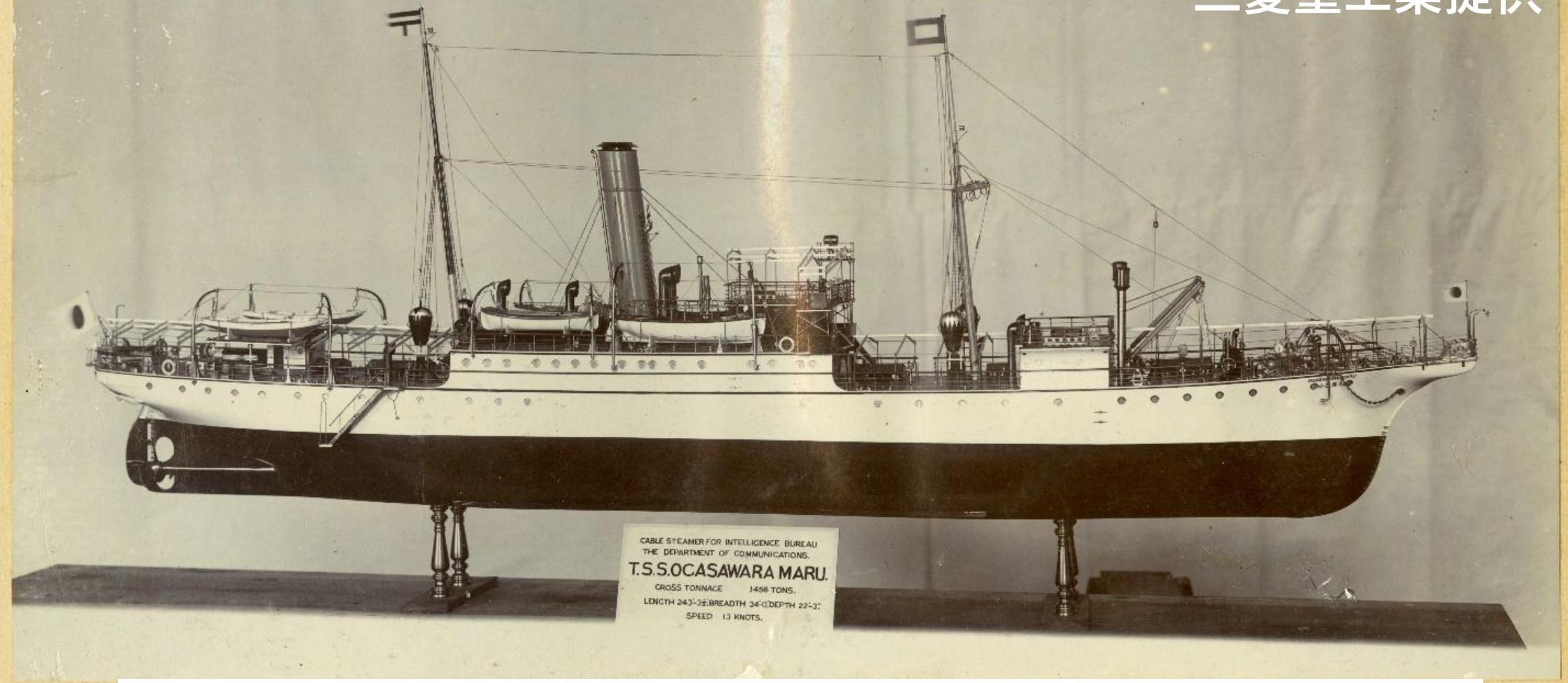
東洋丸

1945年7月6日門司市田ノ浦沖蝕雷



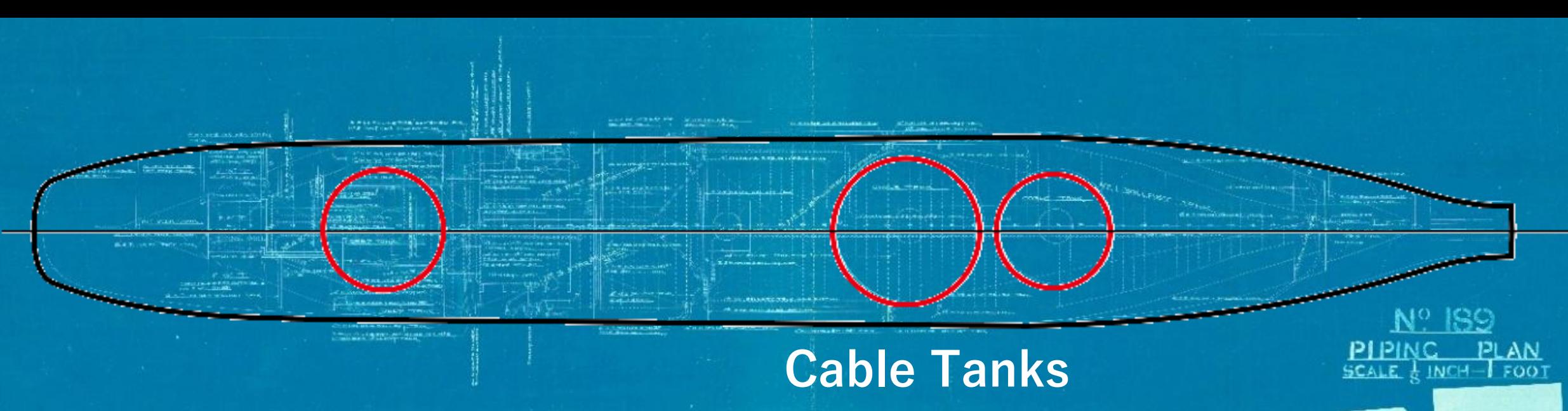
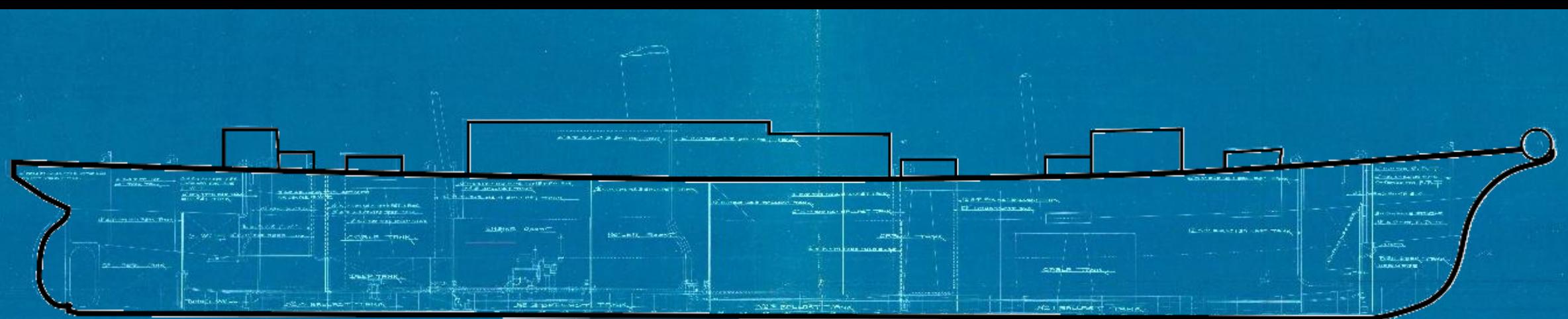
https://www.nttwem.co.jp/special/cable_history/cable_lay/pdf/touyoumaru.pdf

三菱重工業提供



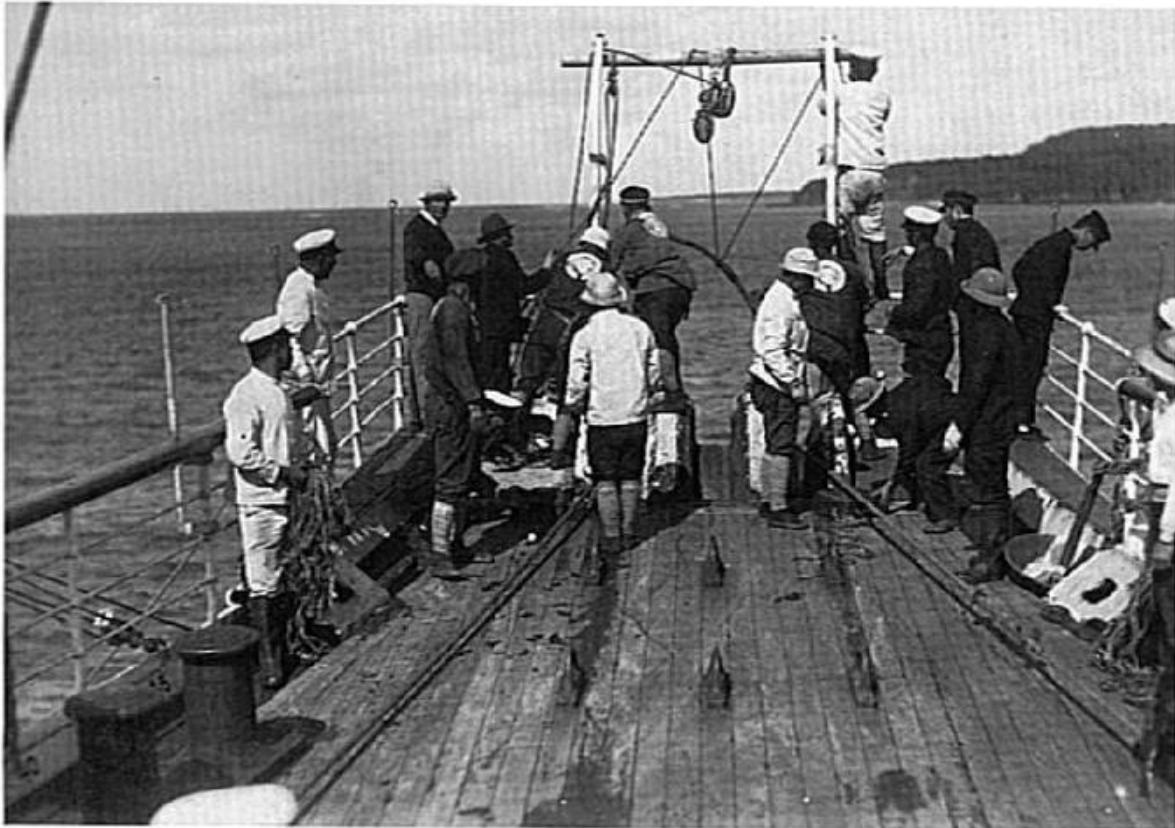
Piping Plan

三菱重工業提供



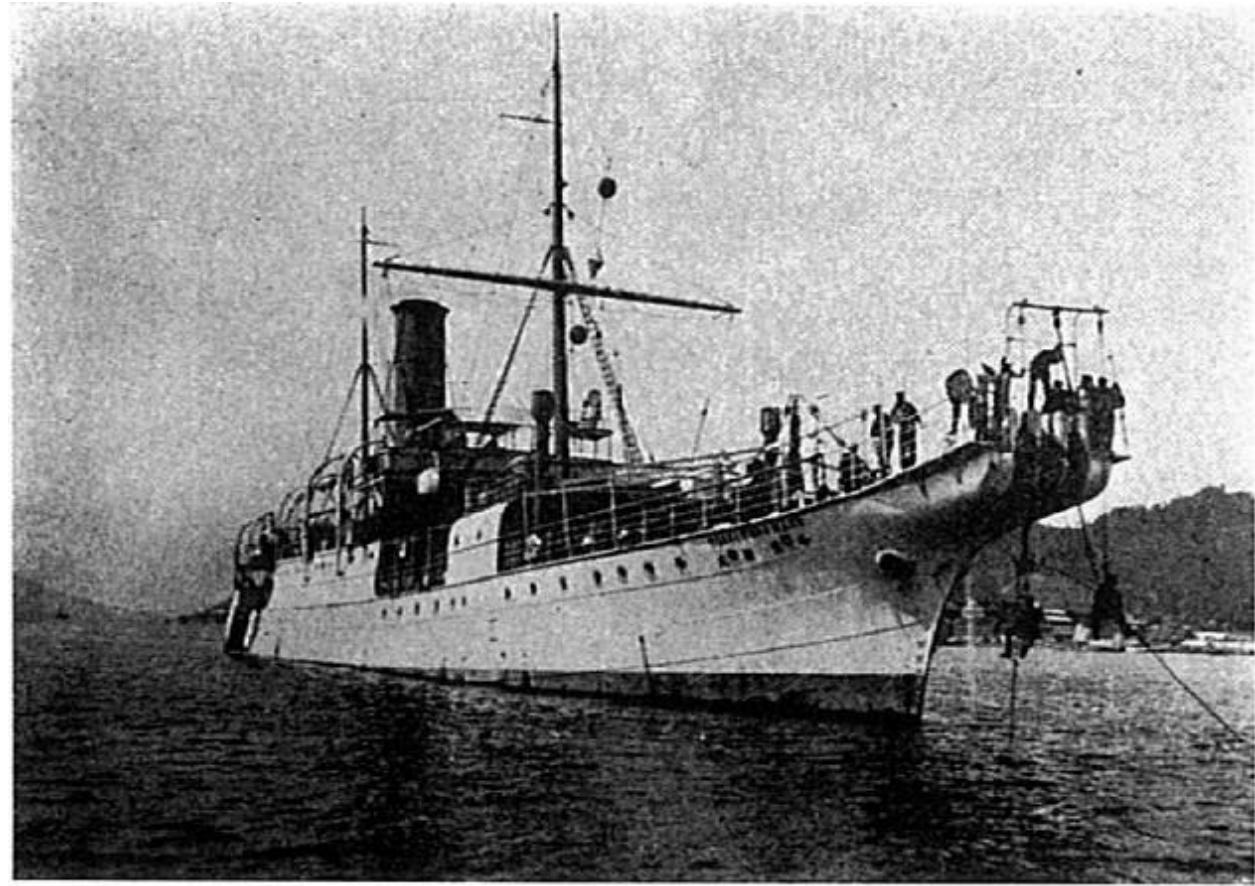
Cable Tanks

小笠原丸



▲船首作業甲板上の作業風景。工事部員と
本船乗組員の作業服に大きな相異がある。
ケーブルの接続を終え、最終沈下作業中。

NTT WE MARINEホームページ
https://www.nttwem.co.jp/english/special/cable_history/cable_lay/pdf/ogasawaramaru.pdf



▲ケーブル探線に成功、船上にケーブル捲込の
ため船首下でケーブル先取りロープ取付中。



▲岸壁繫留中の小笠原丸

建造所 三菱長崎造船所
進水 1906年6月12日
航行区域 近海区域
総トン数 1,404トン
長さ 74.10m
(垂線間長と考えられる)
幅 6.80m
主機関出力 1,789HP
最大速力 12.0ノット

初島型電纜敷設艇 (竣工一)

初島：1940年10月25日（川重神戸）－1945年4月28日（戦没）

釣島：1941年3月28日（川重神戸）－1945年11月30日（除籍）

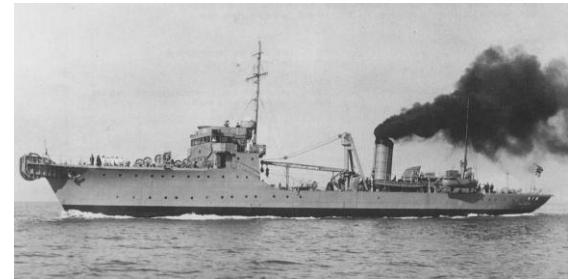
大立：1941年7月31日（播磨）-1945年3月27日（戦没）

立石：1941年8月31日（播磨）-1945年3月21日（戦没）

満載排水量：1,785トン

全長：76.8m

搭載能力：電纜20km、水中聽音機4組



初島



むろと (二代目)

海上自衛隊電纜敷設艦（就役一）

つがる：1955年7月19日（三菱横浜）－1990年3月15日（除籍）

むろと：1980年3月27日（三菱下関）－2012年4月4日（除籍）

むろと：2013年3月15日（三菱下関）－

類別	等級	艦艇(艇)型	艦
戰艦			
巡洋艦			
驅逐艦			
護衛艦			
敷設艦			
初鷹型			
初鷹	勝力、常磐、嚴島、白鷹、八重山、沖島、津輕	扶桑型 長門型 金剛型 妙高型	伊勢型 扶桑、山城 伊勢、日向 長門、陸奥 金剛、榛名、霧島 妙高、那智、足柄、羽里
初鷹 蒼鷹	淺間、八雲、吾妻、磐手、出雲、春日		

0法令-内令提要-16(防衛省防衛研究所) 卷3 追録／第13類 艦船(1)

慟哭の海

樺太引き揚げ三船遭難の記録

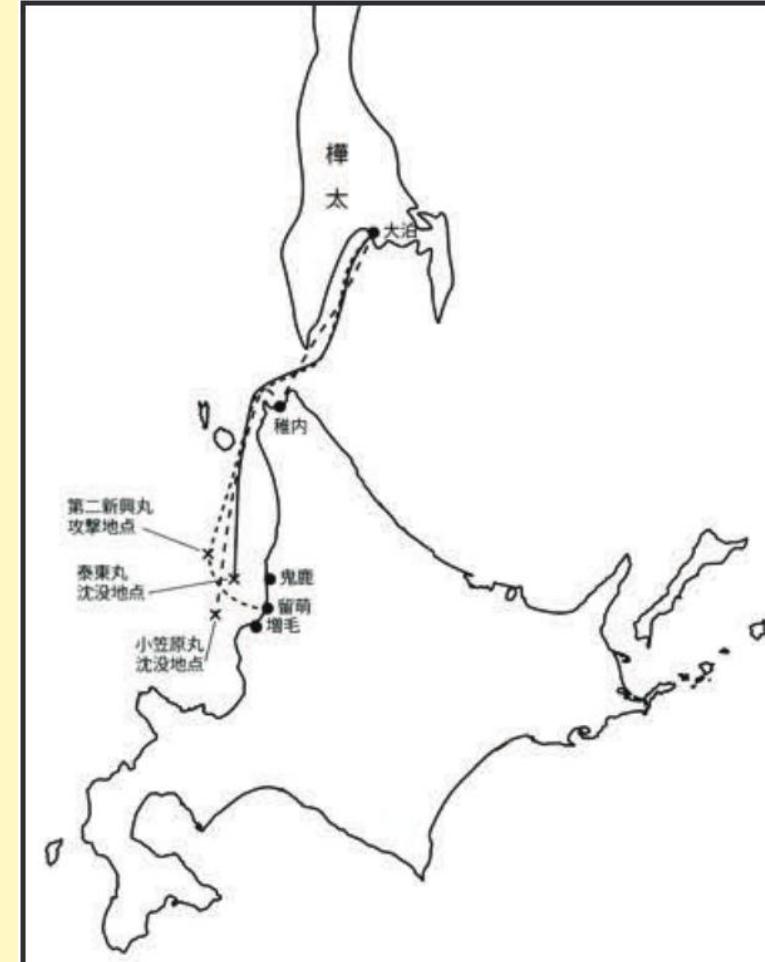
北海道新聞社編

道新選書



るもいおきさんせんそうなん
留萌沖三船遭難

しゅうせんひわ
～終戦秘話～



福士廣志著、留萌市教育委員会、1990

https://www.e-rumoi.jp/syougaigakusyu/page29_00095.html

1945年8月

小笠原丸

19日	1,500人余りの引き揚げ者を乗せて大泊発、稚内へ
20日	17時ごろ大泊着 23時45分1,514人の引き揚げ者を乗せて大泊発
21日	11時ごろ稚内着、887人下船。 16時すぎ稚内発、小樽へ 乗員八十二人、海軍警備隊員、下士官以下十七人、 引き揚げ者、推定六百三十三人
22日	20時利尻島をかわす 4時15分過ぎ、1本目の魚雷をかわす。 4時22分2本目の魚雷を被雷 船首を空中高く突き出して、ほとんど垂直に近い形で・・・ 沈んでいく（工事主任大崎談） 潜水艦から機銃掃射を受ける（航海士高見沢談） (沈没時時系列は参考文献[2]から抜粋、一部修文)

泰東丸

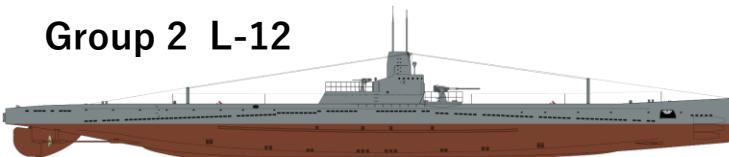
21日	23時ごろ大泊発
22日	9時50分ごろ潜水艦の砲撃を受け沈没 (参考文献[1]から抜粋) 1983年 6月6日 魚探にて発見 (参考文献[1] p 139) 7月6日 潜水調査開始 (参考文献[1] p 141)

第二号新興丸

21日	9時大泊発
22日	4時55分ごろ潜水艦の魚雷を受け大破 9時ごろ留萌港南岸に着岸

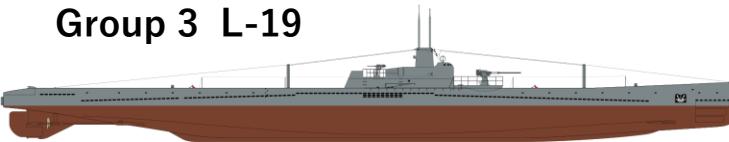
福士廣志：「留萌沖三船遭難—終戦秘話」、留萌市教育委員会、1990

Group 2 L-12



L-12	7-Nov-36	Renamed <i>B-12</i> in 1949, decommissioned in 1959; stricken in 1983; hull entombed in a stone pier in Magadan in 1986
------	----------	---

Group 3 L-19



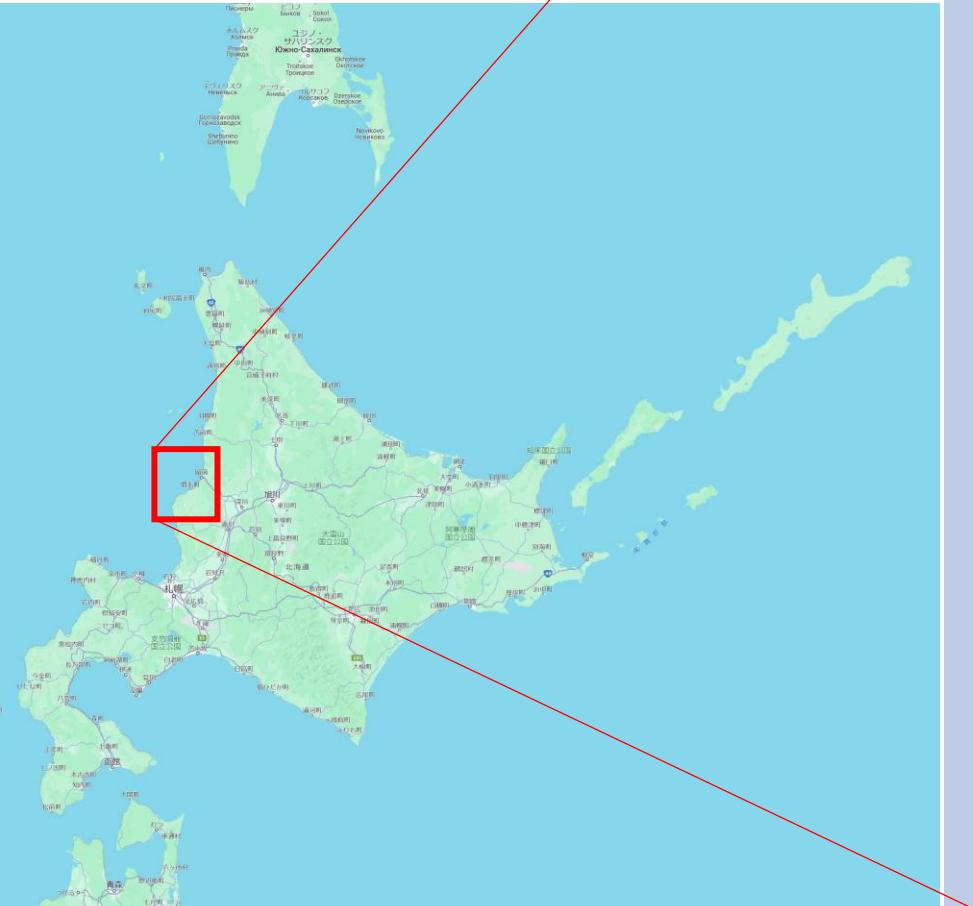
L-19	25-May-38	Lost on or after 24 August 1945 to unknown cause; probably mined in or off the La Pérouse Strait
------	-----------	--

宗谷海峡

艦名	L-12	L-19
艦種	レーニネツ級潜水艦 第2改系列	レーニネツ級潜水艦 第13系列
艦長	シェルガントエフ海軍大尉	コノネンコA. S. 海軍少佐
乗組員	55名	55名
全長	85.3m	85.3m
全幅	7.0m	7.0m
兵装	B-24 1936年型10cm(51口径)单装速射炮1基 21-K 1934年型4.5cm(46口径)单装高射炮1基 53.3cm水中魚雷発射管单装8門(前部6門、後部 6門、予備魚雷18本) 機雷18発	B-24 1936年型10cm(51口径)单装速射炮1基 21-K 1934年型4.5cm(46口径)单装高射炮1基 53.3cm水中魚雷発射管单装8門(前部6門、後部 6門、予備魚雷18本) 機雷18発

こうげき せんすいかん がいよう
攻撃した潜水艦の概要

小笠原丸と泰東丸 の 沈没位置



10km

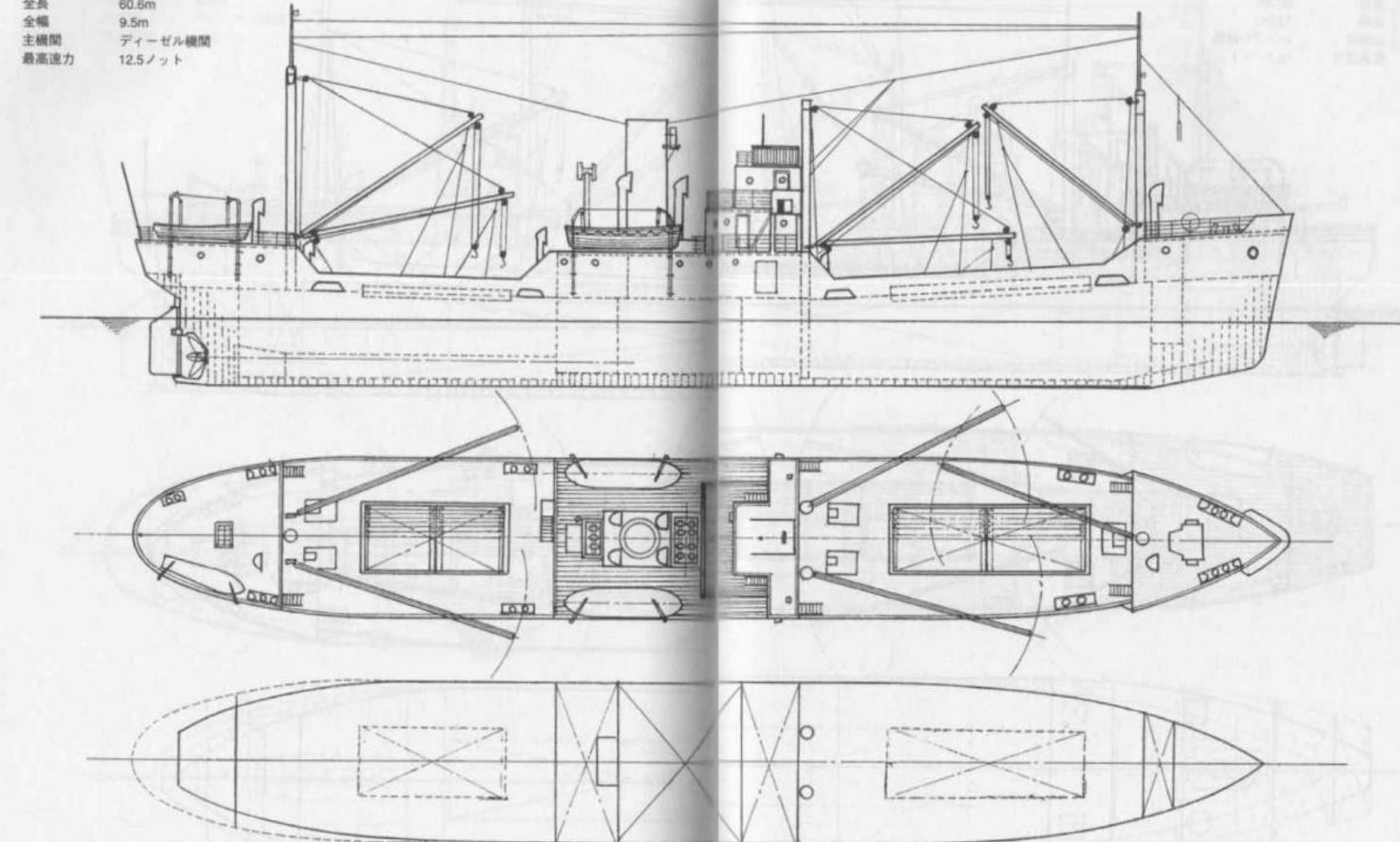


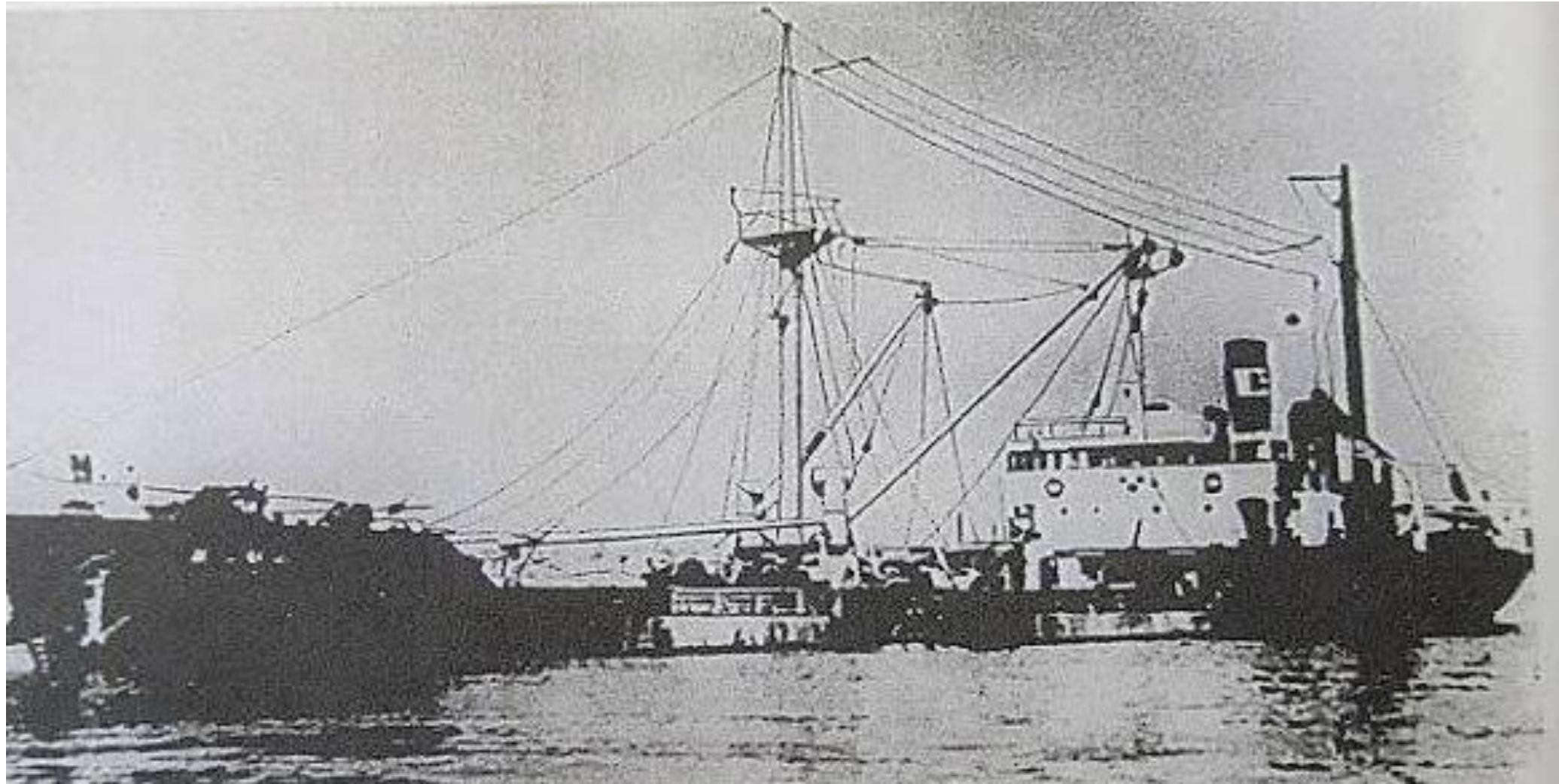
泰東丸

1E型貨物船基本仕様
総トン数 830トン
積載トン数 1320トン
全長 60.6m
全幅 9.5m
主機関 ディーゼル機関
最高速力 12.5ノット

2 E型戦時標準船の一般配置図

第7図 E型貨物船外形図

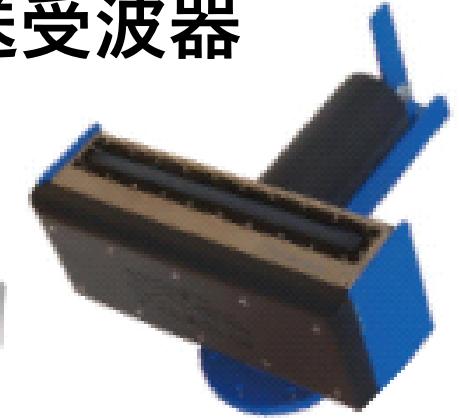




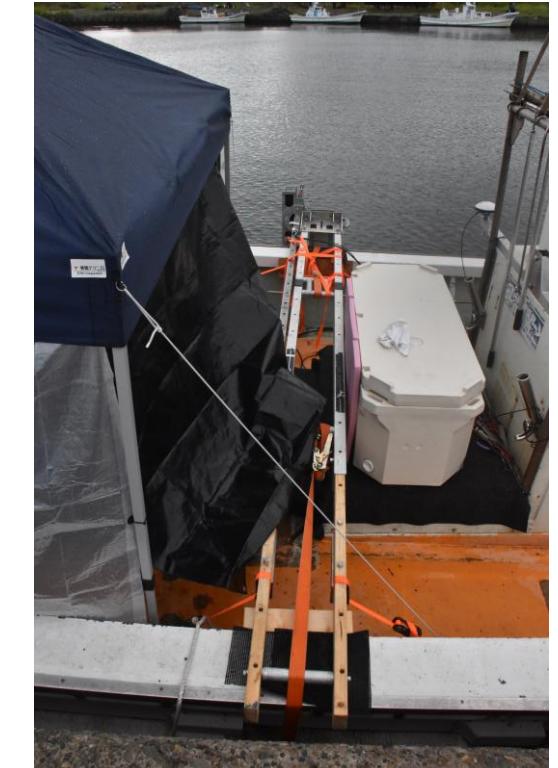
泰東丸の同型船
泰東丸の写真は見当たらない

マルチビームソナー Multi-Beam Echo Sounder

送受波器

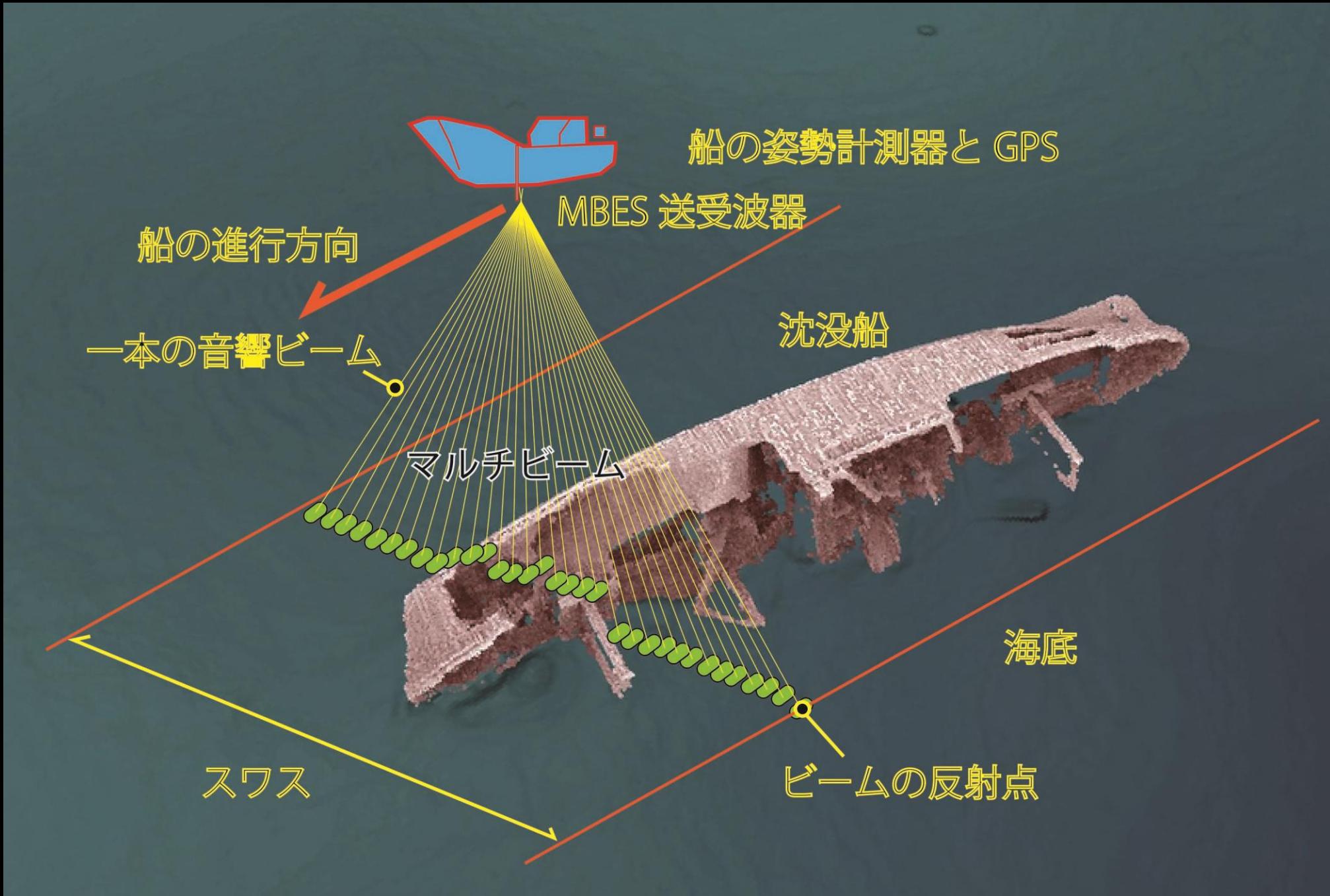


MBESを取り付ける治具



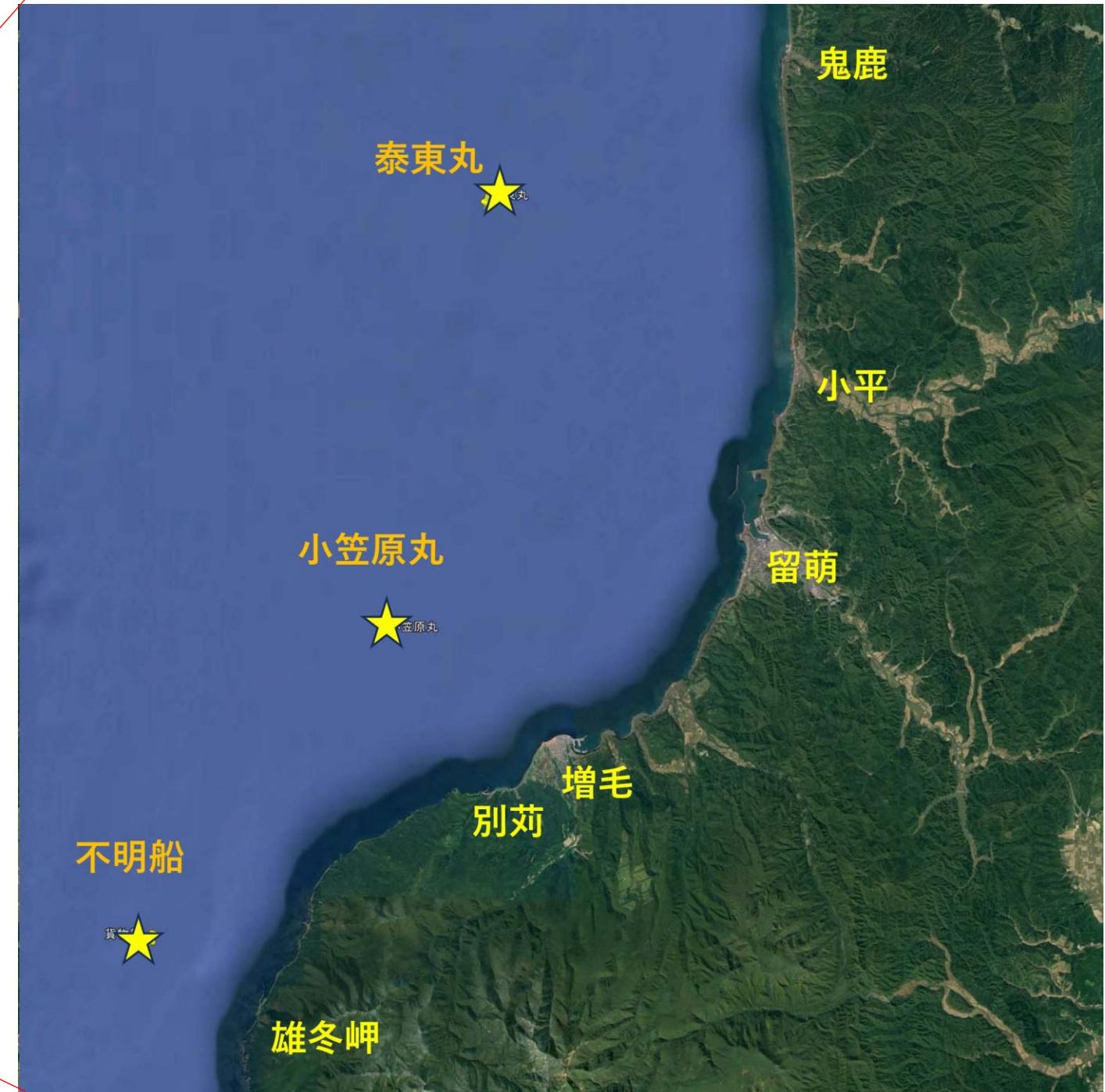
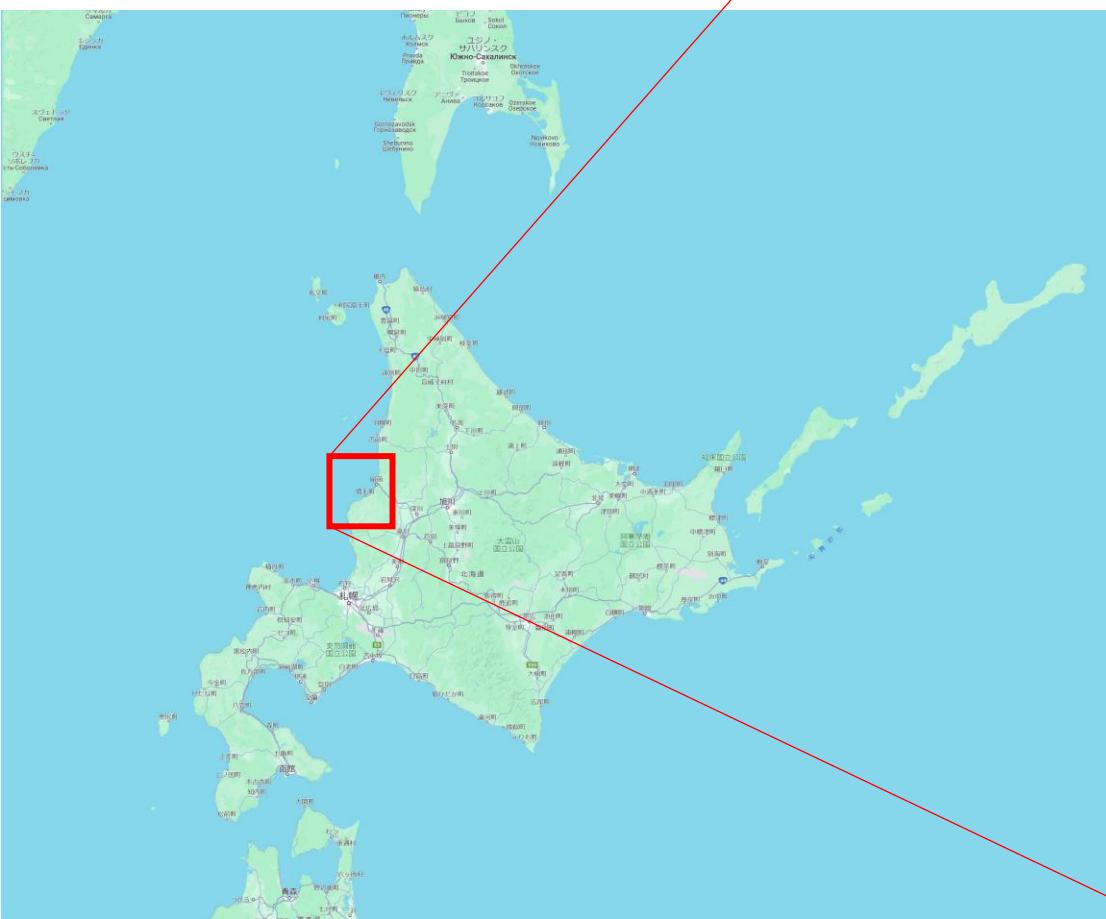


第二紀宝丸



発見位置

船名	緯度（北緯）	経度（東経）	水深	全長
小笠原丸	43度54分16.4秒	141度24分42.8秒	57m	83m
泰東丸	44度05分16.8秒	141度28分22.1秒	58m	52m
不明船	43度45分53.2秒	141度16分18.8秒	103m	75m

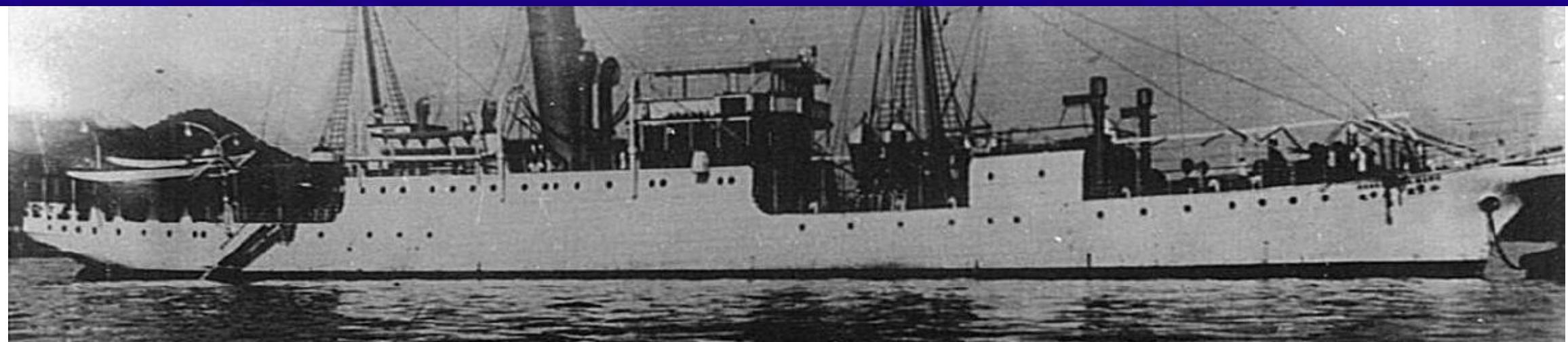
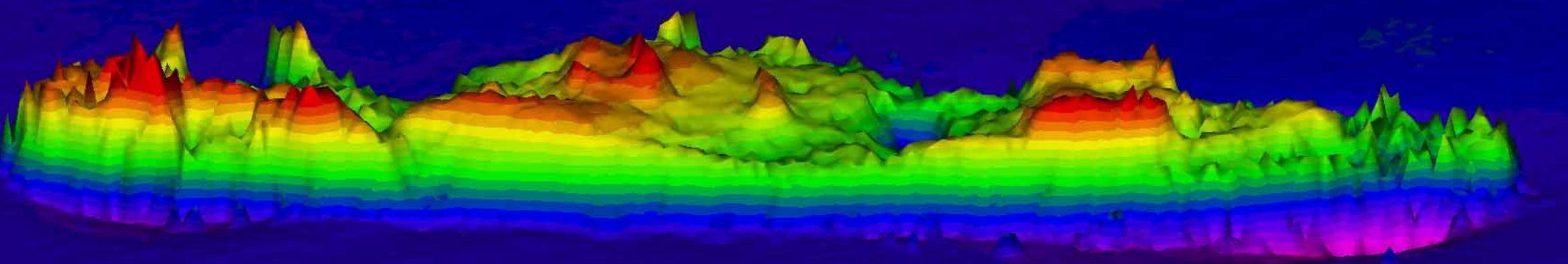


小笠原丸



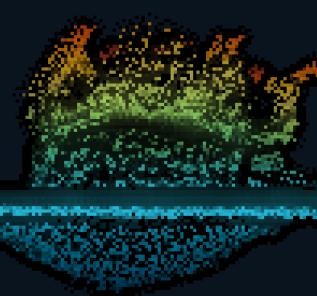
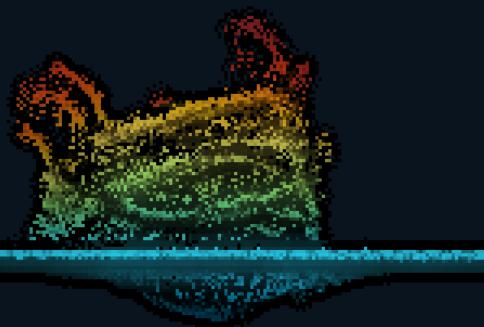
Cable Tanks

小笠原丸

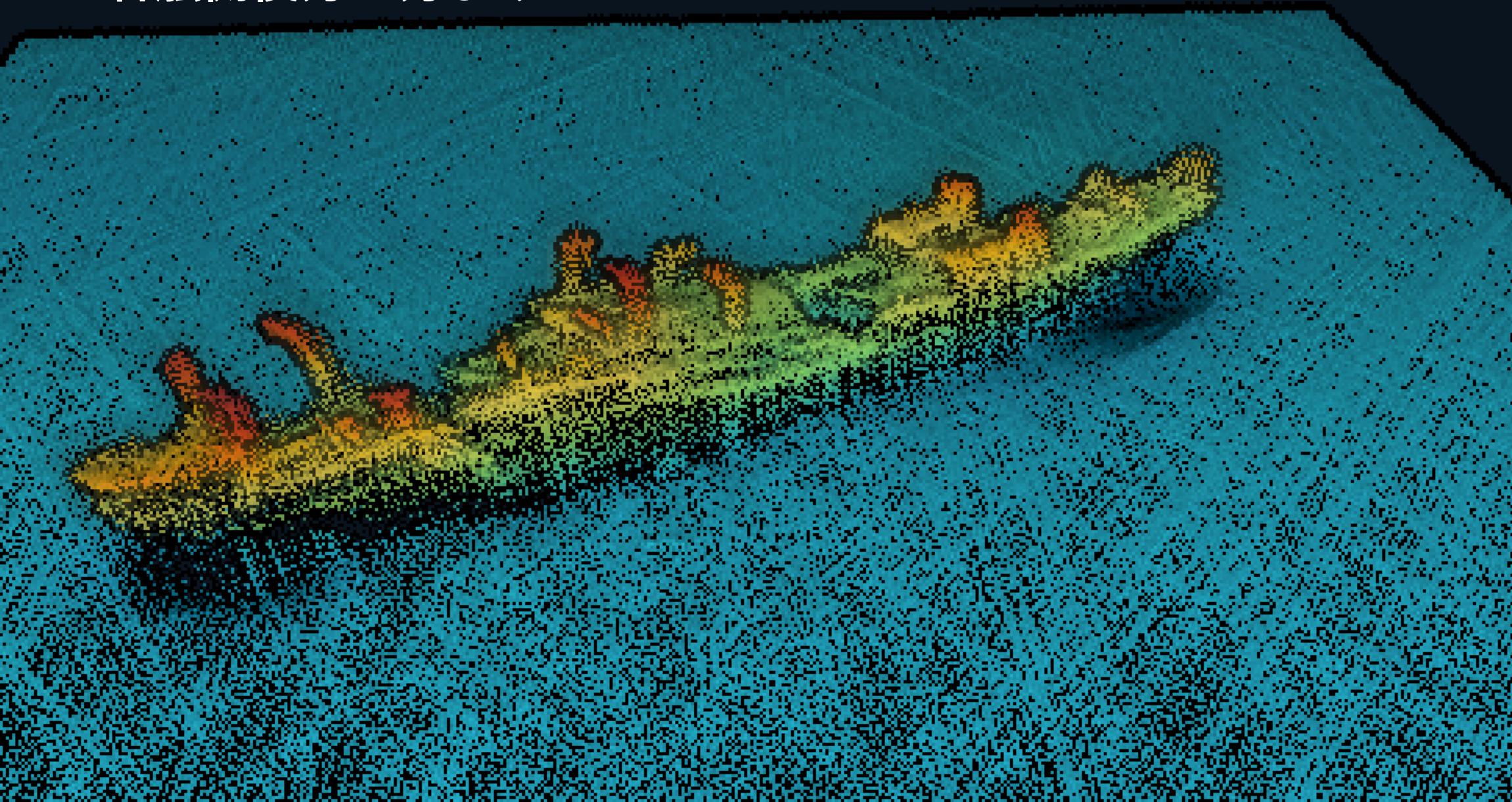


船尾側

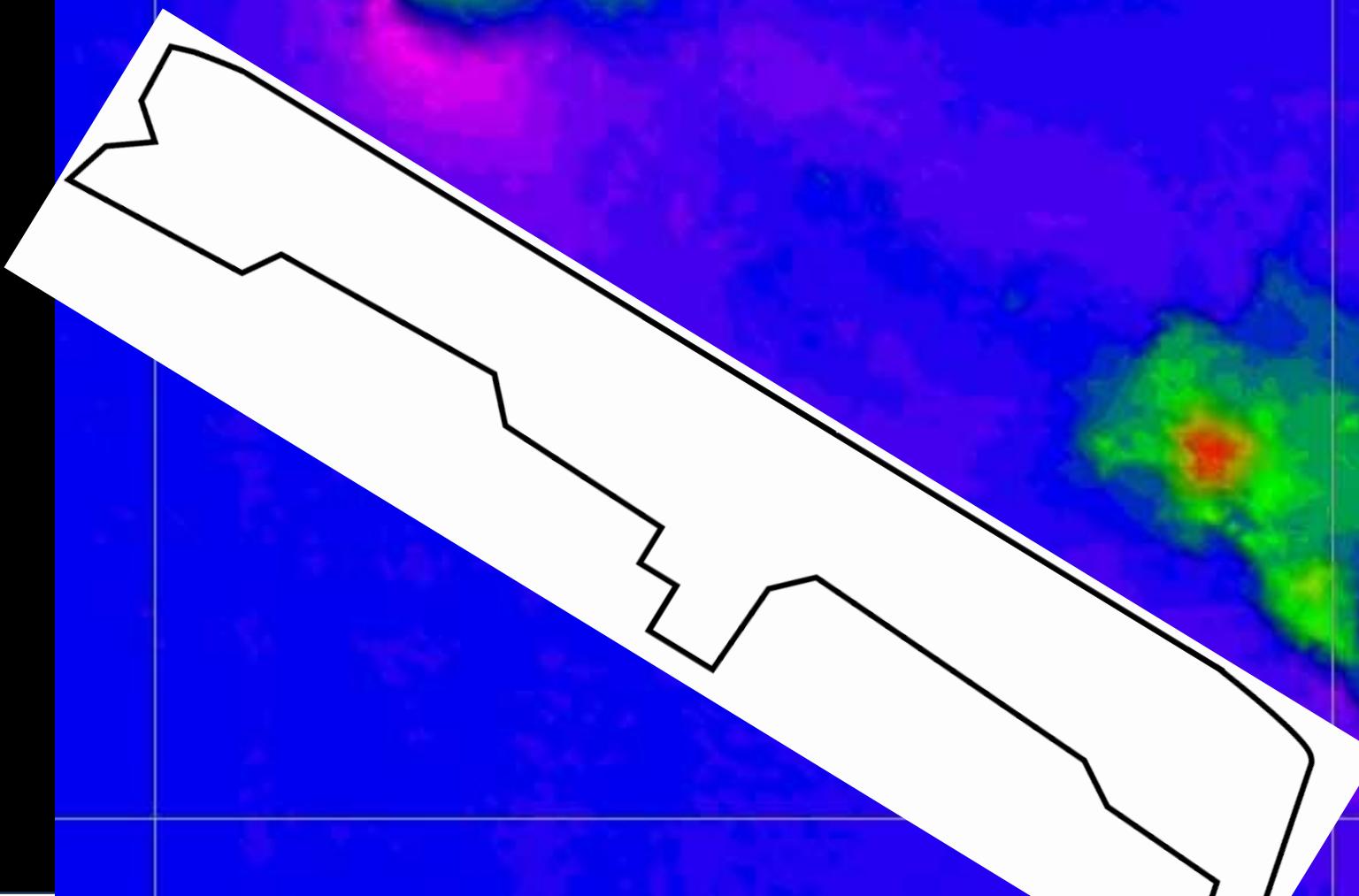
船首側



右舷側後方上方より



泰東丸

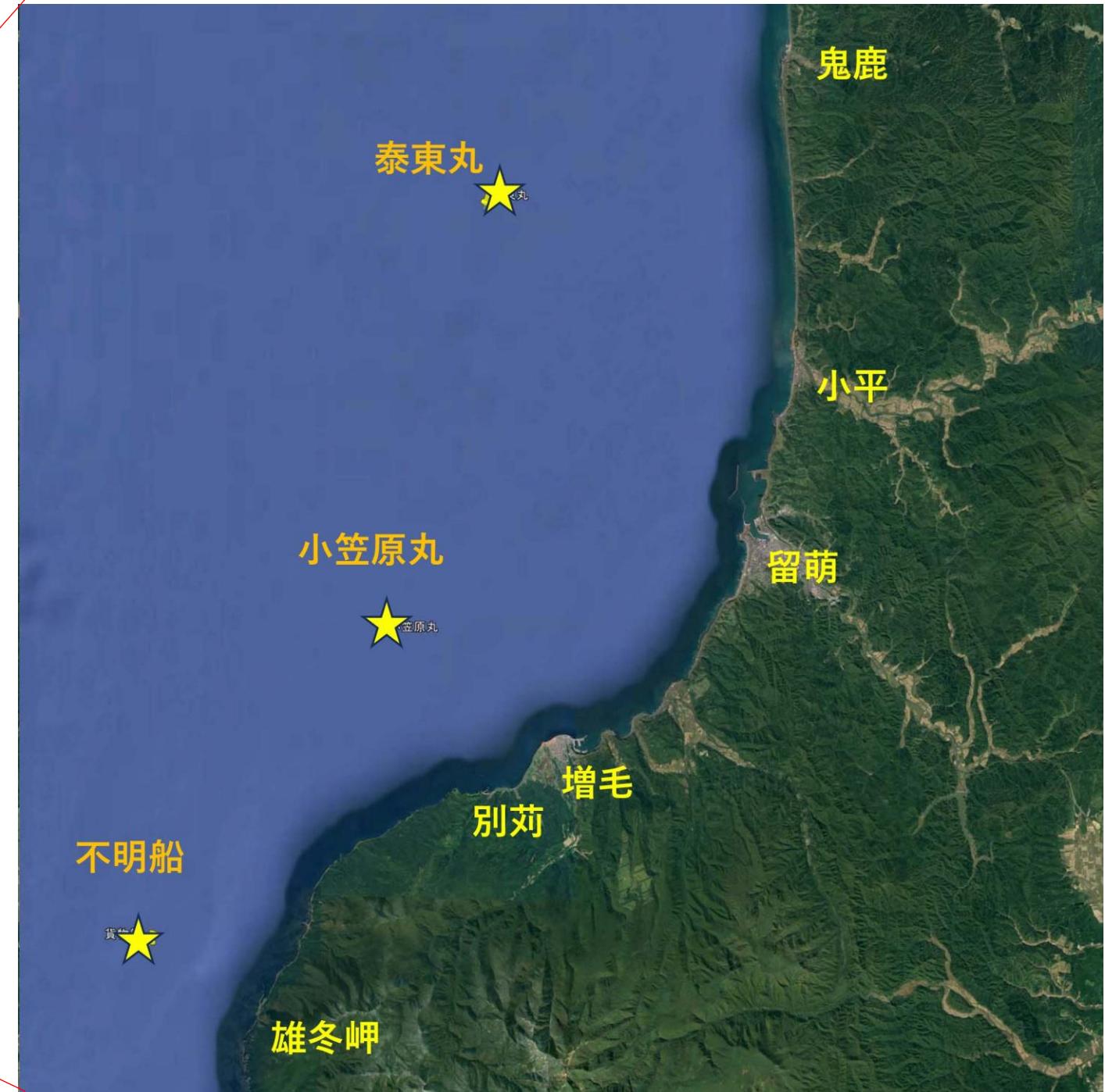
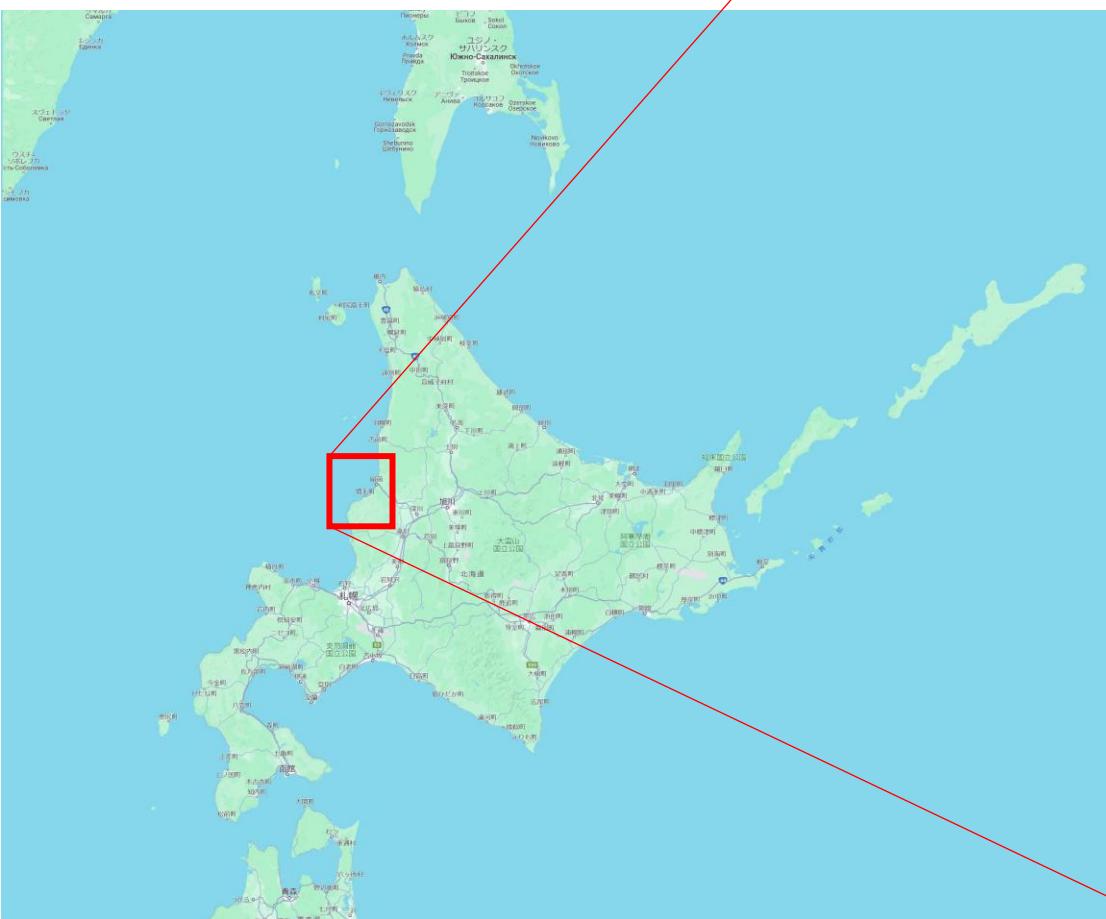


小平町郷土資料館



発見位置

船名	緯度（北緯）	経度（東経）	水深	全長
小笠原丸	43度54分16.4秒	141度24分42.8秒	57m	83m
泰東丸	44度05分16.8秒	141度28分22.1秒	58m	52m
不明船	43度45分53.2秒	141度16分18.8秒	103m	75m



慰靈祭

8月22日留萌市了善寺



慰靈祭

8月22日増毛町墓地







標識名
大瀬崎灯台

灯台情報



灯台を含む写真（近景）

1. 灯台の歩み

明治 12 年 12 月 初点（鉄造）
船舶気象観測業務と船舶通過船の記録開始
昭和 28 年 3 月 90 cm 複式レンズ回転灯器に変更
昭和 46 年 3 月 灯塔建替（コンクリート造）
平成 16 年 4 月 長崎海上保安部が管理

2. その灯台を一言でいえば（キャッチコピー）

東シナ海を一望できる灯台

（3）灯台と地域の関わり

昭和 20 年 8 月 7 日薄暮に米潜水艦の 20 分間にわたる艦砲射撃を受け、間断なく発射する 40 発の 1 弾は灯台丸屋根を貫通したが、レンズは奇跡的に破壊を免れた。灯台の背後に海軍通信施設があったので、これが攻撃目標となつたのである。

この大瀬崎の山頂にある無線電信所は、過ぎし日露戦争で、日本海海戦の端緒となつた哨艦信濃丸の「敵艦見ゆ」の第一報を受信した歴史があり、電波山と地元では呼んでいる。

大瀬崎無線電信の歴史継承会

1905年5月27日4時45分に「敵艦見ユ」の暗号を受信
2025年5月27日は120年記念日



キモミテ

海上無線50周年記念 日本電信電話公社

大瀬崎 無電の址の記念碑

2023年5月27日04時45分撮影

海上無線50周年の電電公社の記念碑
日露戦争「敵艦見ユ」の碑ではない



和	大正	明 治					年号
		年	月	日	年	月	
八	三	一三	三	四一	三六	三五	八
三	四	二	二	七	四	三	一
六	一六	一一	一一	一	二	二	一
荒川郵便局	福江郵便局	福江～富江～玉之浦間電話事務開始。	（福江～玉之浦一番線・福江～富江二番線開通）	佐世保～大瀬崎線開通。	大瀬崎無線電信局開設。	大瀬崎無線電信局開設。	佐世保～大瀬崎線開通。
大瀬崎無線電信局	荒川郵便局	電信事務開始。（福江～荒川一番線開通）	（福江～荒川一番線開通）	福江電信局廢止され、福江郵便局で電信事務取扱い開始。	福江郵便局で電信事務取扱い開始。	福江郵便局で電信事務取扱い開始。	福江郵便局で電信事務取扱い開始。
大瀬崎無線電信局は諫早市へ移転。	荒川郵便局	電信事務開始。（福江～荒川一番線開通）	（福江～荒川一番線開通）	佐世保～大瀬崎線開通。	大瀬崎無線電信局開設。	大瀬崎無線電信局開設。	佐世保～大瀬崎線開通。
大瀬崎無線電信局は諫早市へ移転。	荒川郵便局	電信事務開始。（福江～荒川一番線開通）	（福江～荒川一番線開通）	福江～富江～玉之浦間電話事務開始。	（福江～玉之浦一番線・福江～富江二番線開通）	佐世保～大瀬崎線開通。	佐世保～大瀬崎線開通。

第六節 通 信

福江島における電信電話のあゆみ

あ ゆ み

福江郵便役所は、福江郵便局となる。

長崎～福江間の海底線施設完了。（電信回線一条九九〇km、明治二三年八月二六日から約三年間工事にかかる。工費概算一一八万円）

福江電信局設置され、電信事務取扱い開始。

大瀬崎海軍望楼電信取扱所で公衆電報取扱い開始。

福江電信局廢止され、福江郵便局で電信事務取扱い開始。



北側から見た通信所（年代不明）

海軍軍令部

明治三十七年海戦史 第四部 卷四

極秘

[タイトルなし]

明治三十七八年戰役中望樓一覽表

佐世保鎮守府所管海軍望樓

鑄守府直屬望櫓

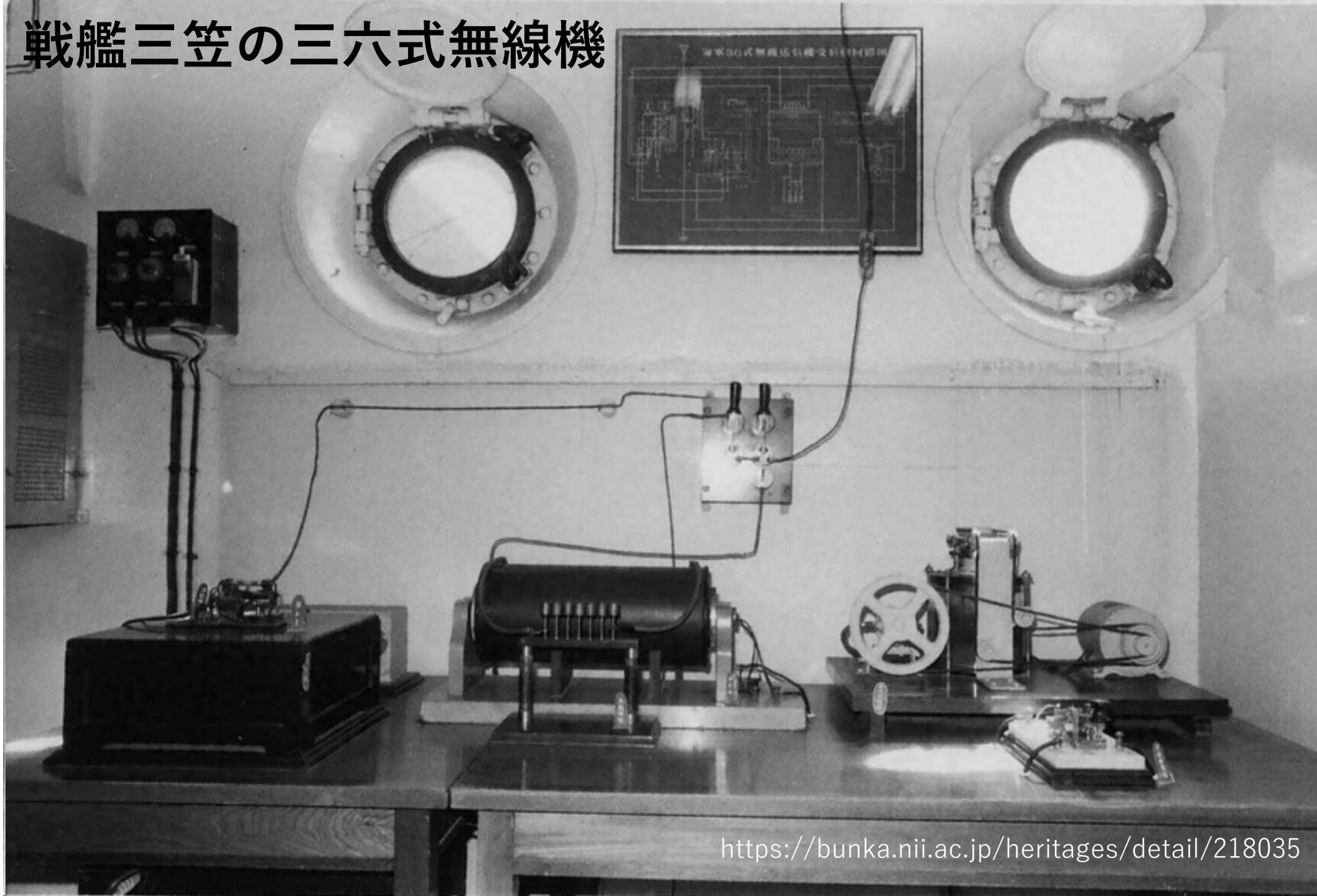
明治三十七八年戰役中望樓一覽表

佐世保鎮守府所管海軍望樓

鎮守府直屬望樓

同	假設	同	同	同	同	同	常設	常設假若	望樓名所	在
城ヶ岳	ジヨウカツ	皆白	カイハ	壹岐	チシキ	佐天	サテイ	大志	オシ	野母
五島宇久島	ゴトウシマクシマ	通嶽	ジヨウ	狗鼻	クガミ	多	タク	自岐	シキ	肥前國野母
電 話	デンワ	岸	カマ	薩摩國江豚	サマクニシマヅ	大隅國南端	オシクニシタウ	五島福江西	ゴトウフクシキシ	肥前國野母
完 備	エンブ	手旗	ハンドル	完氣象觀測ヲ行フ	エンキサクケンセツヲヨウフ	同	同	同	電 信	電信器
三七、一、二六	サンセイ、イチ、ニロク	三四、五、二二	サンシ、ゴ、ニニ	二七、七、八	ニシ、セ、ハ	二七、七、一二	ニシ、セ、ハ	二七、七、六	二七、七、九	二七、七、七
三七、二、四	サンセイ、ニ、ヨリ	三四、一、一、二六	サンシ、イチ、イチ、ニロク	二七、七、一五	ニシ、セ、ハ	三三、二、二一	サンシ、セ、ハ	二七、七、一六	二七、七、二〇	二七、七、二〇
三七、二、二〇	サンセイ、ニ、ニロク	三七、九、二〇	サンシ、ク、ク	二七、八、一	ニシ、セ、ハ	三三、八、二〇	サンシ、セ、ハ	二七、八、四	二七、八、四	二七、八、四
卒下士	サムライシ	卒下士官	サムライシヤウ	卒下士	サムライシ	卒下士	サムライシ	卒下士	サムライシ	卒下士
三一	サンイ	四二一	ヨリニ	二一一	ニニ	二一一	ニニ	二二二	ニニ	二二二
同	ドウ	同	ドウ	同	ドウ	同	ドウ	同	同	同
	ドウ	同	ドウ	同	ドウ	同	ドウ	同	人夫	ヒトヅ
	ドウ	通	ドウ	通	ドウ	通	ドウ	通	通船人	ドウボウジン

戦艦三笠の三六式無線機





敵艦見ユ

ネネネネ：敵艦隊ラシキ煤煙見ユ

信濃丸発：1905年5月27日4時45分

假裝巡洋艦信濃丸兵裝之圖

緒言九拾載之圖

造船課長



船種：貨客船

所有者：日本郵船

竣工：1900年4月

建造：デビット・ウィリアム・ヘンダーソン社
(グラスゴー)

総トン数：6,388トン

垂線間長：136m

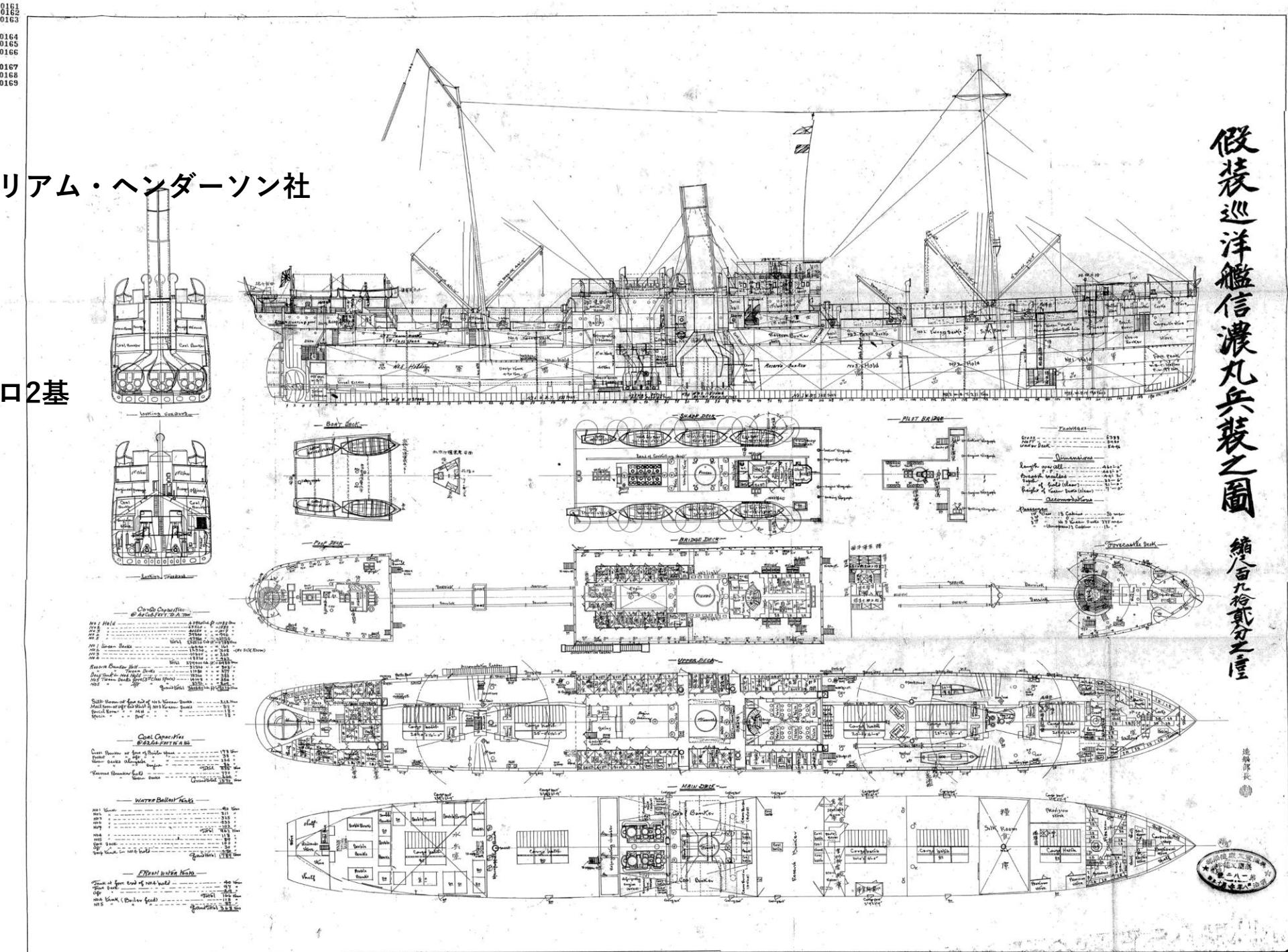
型幅：15m

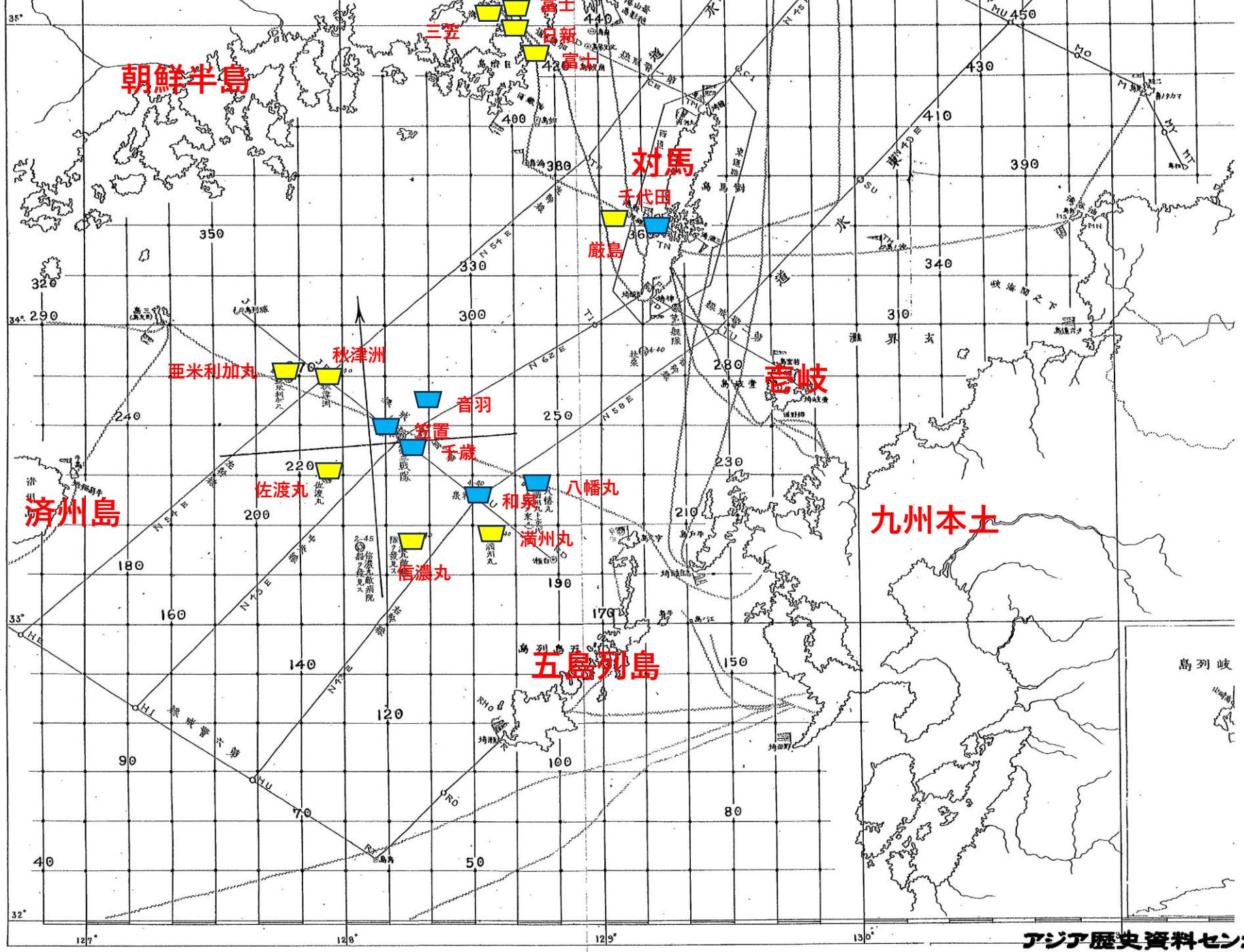
型深さ：10m

主機関：三連成レシプロ2基

定格出力：4,000HP

最大速力：15.4ノット





第3戦隊戦闘詳報 970P

国立公文書館アジア歴史資料センター

第二報

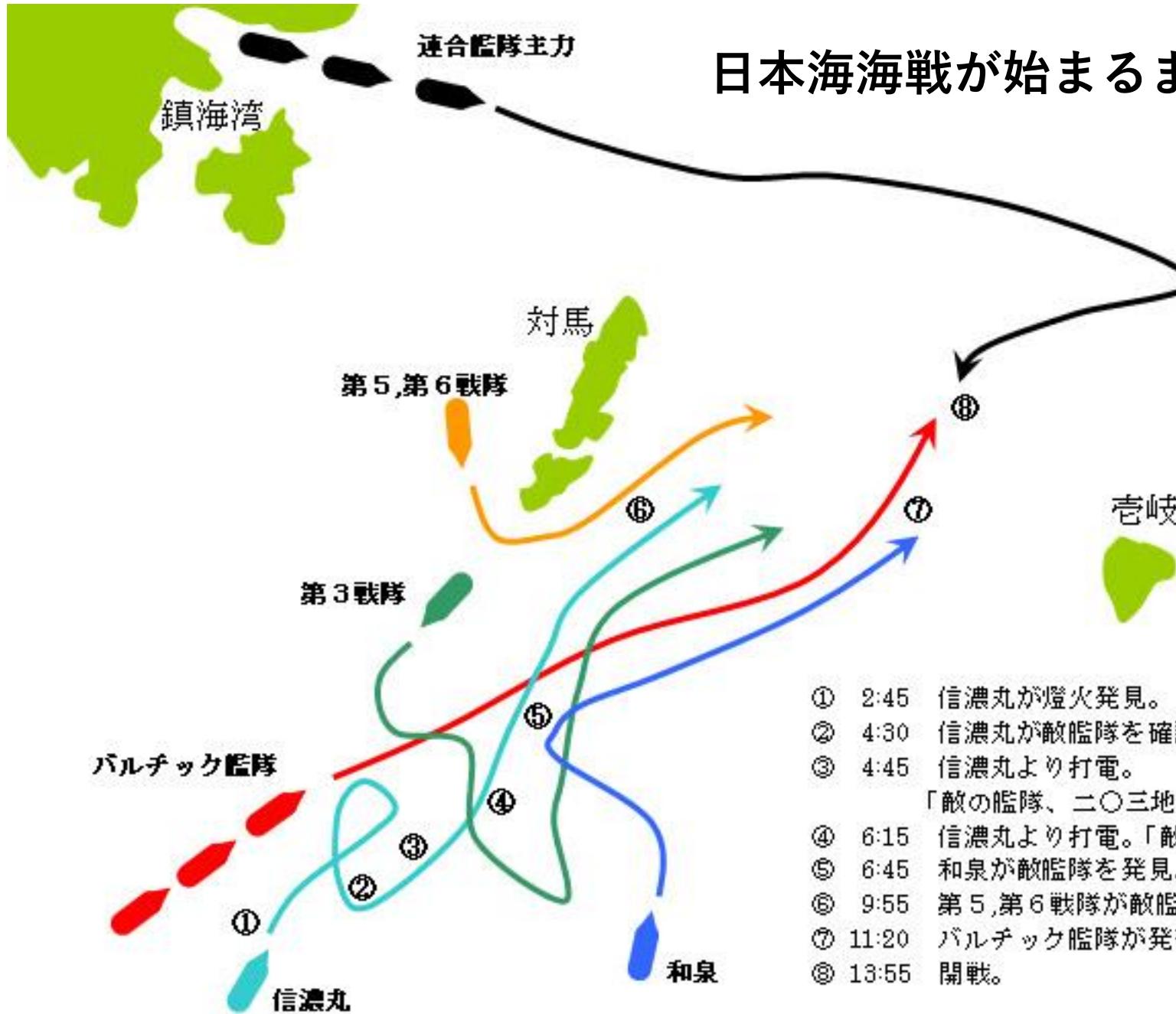
敵ノ第二艦隊見ユ 地点203

タタタタ モ203

和泉の位置情報（225地点）の精度は信濃丸ほかに比べて良いと考えられる。なぜならば、他船に遅くまで港にいたために位置誤差が少なく、曇りが続いている天測ができなかった（加島談）

五	波浪高クシテ常ニ甲板ヲ洗ヒ砲員ハ合羽ヲ着用シテ戰鬥ニ従事セシモトアリサシク衰ヘサハ自ミ至リテ濛氣消散展望自在風力亦沼ンド減シテ唯ク長浪ヲ存スルノミ		
七	我戰隊ノ運動ハ別圖ノ如シ		
八	軍ナル信号、命令、訓令及報告等		
日	時 分 発信艦 受信艦 信 文		
二七	前四五 信濃丸	敵艦隊、全速力ノ蒸汽ヲ驅セ(信号)	
四五〇	右 金	敵第三艦隊見ニ地号二〇三	
五二三	笠 置	敵艦隊東水道ニ向フ如ク見ニ	
五三五	信濃丸	敵ハ二五地英ニアリテ針路北東	
七〇	和 泉	九五三 右 全 嶺島 敵艦隊戰艦五隻一等巡洋艦十隻二等	

第6戦隊の「戦闘詳報」に添付された『第六戦隊無線電信発受信傍聴報告』



東へと移動していくために、大瀬崎海軍望楼では電波を受信しにくくなっていくと考えられる

信濃丸

嵯峨島

2025年9月6日建立





大学の使命

石井洋二郎

元東京大学教養学部長

を問う

日本の大学が、
今、担うべき役割
とは何か？

大学進学率約6割。
しかし大学は
「危機」にある。

「教養」の空洞化、
「経営」偏重・「理系」偏重の運営、
「自治」の喪失――

大学は、過去に学びながら現在
を考える場でなければならない。

過去を知ることで現在を相対化
し、未来を切り開くことが歴史
を学ぶことの意義。